

清水中学校はアクティブラーニングで

劇的に変わった！

〜人間関係プログラムの力〜

高知県土佐清水市立清水中学校
校長 岡崎 哲也

突然「荒れ」に襲われた清水中学校

教室に入らず何人も生徒たちが廊下を徘徊している。教室に入れようとして、臨時で雇用された支援員の若者たちがあたふたと生徒たちの相手をしている。教室の隣に設置されたロッカールームに座り込む。ベランダから紙吹雪をまき、トイレトベーパーを中庭に投げ込む。廊下などに設置されている電気や非常ベルのスイッチは、ほぼ全て押し込まれ、あちらこちらに器物破損の跡がある。2013年、統合新築された「新生」清水中学校は散々な状態に追い込まれていた。子どもたちの悪態や暴力により、疲れ果てた何人かの教員たちは病休に追い込まれた。生徒たちの関係性は「不安」と「恐怖」に支配され、学校へ来づらくなつた生徒たちも多々いた。私は、この清水中学校の2年目、2014年、校長として赴任したのである。入学式の準備をする部活動の生徒の様子を見て「荒れ」が深刻な状況であるのはすぐに理解できた。部活動を行っている生徒たちでさえ全く指導に従わず、自分勝手な言動や弱い生徒たちへの威圧的な態度や暴力、備品の扱い方などは目に余る状態であった。始業式を迎え、2・3年生の前での私の挨拶を、ほぼ半数の生徒たちは聞いていない。教員に対して心を閉ざした状態を感じられ、噂には聞いていたものの、かなり深刻な状況だと感じた。

四国最南端に位置する土佐清水市は、自然豊かで足摺宇和海国立公園の大部分を占め、美しい海岸線に囲まれた観光のまち、漁業のまちとして、「わざわざ来てみたい、住みたいまち」としてまちおこしに取り組んでいる。土佐清水市の偉人、中濱万次郎は幕末から明治にかけて活躍した人物で、日米和親条約の締結に尽力し、その後通訳・教師などとして活躍したジョン万次郎として多くの人たちに知られている。彼を主人公にしたNHK大河ドラマ化実現に向けた運動も進められている。そして、この土佐清水市は私の故郷でもあり、旧清水中学校では長く勤務してきた。私の教員としての拠り所は、この土佐清水にある。

「新生」清水中学校は、予想される南海トラフ大地震からの津波に備えるための高台移転として土佐清水市内5中学校が統合し、一市一校の中学校として約300名規模でスタートした。「統合後は制服がそろうまでは大変」とよく言われるが、当初から、生徒たちは統合による様々なストレスにより多くの課題が噴出した。統合での「荒れ」はある程度予想していたが、教員の想像をはるかに超えたものだった。「荒れ」の要因を一言で言えば「市内5校の学校文化のすりあわせ不足」であった。引越してから実質一週間で迎えた入学式、学校経営ビジョンの不徹底、教員の意思統一不足、生徒の問題行動への対処・対応への職員の不安、規範の基準の共有不足などが招いた結果であった。暴力行為、授業妨害、エスケープ、非常ベル・防火シャッターの作動、器物破損等々、まさに新築の建物が唸りを上げていた。生徒たちの教員への信頼感は低く、「もつと厳しく指導してほしい。」と不信を募らせる生徒が多々いたのも事実であった。教員との「信頼関係の喪失」、生徒の「自尊心の低下」「学力の低下」が深刻な状況になっていった。ある関係者からは「高知県でいちばん荒れた学校」という声も聞かえてくる。私は赴任にあたって、「清水中学校を是が非でも立て直す。」という並々ならぬ決意をもつて臨んでいた。

私はかねてから、教育の根底にあるべきものは「人間関係づくり」に基づく「人間力の育成」であると感じていた。そして、この力を育成していくための「人間関係プログラム」を実施することが清水中学校の「荒れ」を克服する唯一の手段であるという確信もあった。半数の生徒たちが話を聞いていなかった。始業式だったが、その終わりに、アイスブレイク・プログラムのひとつである「一致団結そぐれ！」を私自身が生徒や教員に呼びかけ、全員で行った。「清水中学校を一致団結して幸せの多い学校にしていこう。」という私の宣言だったのである。

私と「人間関係プログラム」の出会い

私は2010年度より黒潮町立大方中学校で校長として勤務するようになった。大方中学校も生徒指導上の諸課題があり高知県教育委員会指定「コーデイネーション型生徒指導推進事業」を受けて取り組んでいた時、初めて「人間関係プログラム」と出会った。文部科学省の研究開発学校であった大阪府松原市

立松原第七中学校で取り組まれていた「人間関係学科3年間60時間のプログラム」から厳選された「あいあいネットワークofHRS、24時間のプログラム」である。

簡単にプログラムの紹介をすると、成長のプロセスを「依存的なあり様から主体的なあり様へ」と規定し、「認知 行動 評価のスパイラル」を原理としている。プログラムの内容はこれまでのグループアプローチ（「ソーシャルスキルトレーニング」「構成的グループエンカウンター」「ストレスマネジメント」「アサーショントレーニング」「7つの習慣」等々）の成果を取り入れたワークショップ&ファシリテーション型の授業である。私が大方中学校で取り組み始めた頃は、「あいあいネットワークofHRS、24時間のプログラム」は成立過程にあり、島根県松江市立第一中学校とともに、「人間関係プログラム」の実践校としてお互いの授業を参観しあつたりして、交流を進めながらプログラムの完成に貢献してきた。

個人は、常に集団の雰囲気などに左右されるもので、所属する集団の傾向によつて個人のあり方も変わる。生徒を個人として捉えつつ、集団の傾向を的確につかみ、「互いに認め合い、支え合える人間関係づくり」を仕組んでいくことで、より良い集団へと成長させる。そのために、大方中学校では、ソーシャルスキル・出会いと気づきの力（エンカウンター）・人間関係調整力の育成など、学級や学年の実態に即した具体的な指導の手法などを研修しなければならぬと考え、研究を推進してきた。コーディネーション研修を通じてプログラムの知識を身につけ、教員が実際にロールプレイを演じることが通じて手法を学び資質向上を図ることができたのである。学級で「人間関係プログラム」を実施することにより、生徒たちは、より良い人間関係を築こうとするようになり主体的に行動しようとする生徒が多くなつてきた。計画的に実施した学年の生徒たちは、学力も向上し安定した学校生活に繋がっていった。

2013年、次に校長として赴任した四万十市立下田中学校においてもプログラムを計画的に導入した。小規模校であるが児童養護施設の生徒が通学しており、「人間に對する強い不信」を強くかかえた生徒たちが多くいる状況の中での支援について、「人間関係プログラム」の有効性をここでも感じることができた。そして、下田中学校での2年目を展

望していたまさにその時、清水中学校への転勤を命ぜられたのである。

勝負の一年、そして・・・

私は、赴任後すぐに勝負をかけた。よく管理職が口にする言葉であるが、「一年目は様子を見て・・・」などという余裕などあるはずがない。なぜなら、様子を見ている間にも生徒たちの間に侵害が起こり、何人もの子どもたちが傷つき、難しい人生を強いられる。一日も早く清水中学校に「安心」と「信頼」の場を構築しなければならなかつたのである。私は教員一人ひとりに「主体的になる」ことを問いかけた。「人まかせ」にしたり「まわりのせい」にしたり、「相手を非難」したり、「自分を押し殺し」たり、そんな教員の依存的な部分を見つけ、話を聴き出すことにより、気づきを促していったのである。依存的なあり様が満ちている関係性からは「不安」と「恐怖」しか生まれない。生徒たちが荒れたことによつて生じたそんな依存的な関係性に教員自身が気づくことにより、「安心」と「信頼」の関係性を教員から築いていくことに心血を注いでいった。教員がモデルとなれば、いずれは生徒たちへと広がっていく。まず、教員が成長のプロセスを歩んでいくことを望んだのである。主体的なあり様をめざす授業Ⅱ「人間関係プログラム」は「ジョン万タイム」と名づけられ、一学期から実施がスタートした。

この年、4回設定したコーディネーション研修は、「人間関係プログラム」の授業を体験し、伝授してもらうだけに留まらず、私も含めた清水中学校の教員全員が成長のプロセスを歩める力をつけていったファシリテーション研修だったのである。簡単に紹介しよう。

①第1回目 2014年5月21日

【テーマ】アサーションロールプレイング
アサーションは、1970年代にアメリカで生まれたコミュニケーション法である。「自分も相手も大切にしながら主張し、折り合いをつけていく」スキルである。その中でもDESC法は、1)くりかえす、2)共感する、3)主張する、4)選択する(代案を出す)、というものである。この研修では、ロールプレイのモデリングを通じて自己開示することの素晴らしさを学んだ。教員がひとつの役割を演じることにより、共感性を深め相手を理解しようとする力をつけていく。ある教員が

こう言った。「演じることは、自らの殻を打ち破ることなのですね」と。

②第2回研修 2014年8月7日

【テーマ】ストレスマネジメント
プログラムの前半に組み込まれた核心をなす授業である。人間の成長のもととなる自己管理能力、その自己管理能力の基礎がストレスマネジメントである。プログラムの実施が始まった一学期であったが、まだまだ困難は多く、はつきりとした成果は見えづらい。ストレスを多く抱えている生徒や教員にとってストレスをマネジメントしていく力は不可欠である。ストレスによって生まれた感情をしっかりとつかみ、感情をコントロールしていく力。教室に入ることができない生徒たちにとっては絶対に必要な力であろう。

③第3回研修 2014年10月24日

【テーマ】公開授業・研究協議

「人間関係プログラム」のなかにある「アニメの村」の変形バージョンを一年生が実施。グループダイナミズムに基づいた情報交流の大切さに気づく授業である。教育委員会、校区の小学校だけでなく、同じ実践校である松江市立第一中学校からも大挙駆けつけて下さった。生徒たちは何とかなりきり、全員が着席できた。小さなことだが大きな一歩になった。研究協議だけでなく、夜の交流会も通じて、松江市立第一中学校の先生方から同じ仲間にあたかさと、包み隠すことのない激励をいただいた。この頃になると、生徒にも教員にも変化が見え始めてきたのである。

④第4回研修 2014年2月5日

【テーマ】共感性と自己管理能力

アサーションの集大成の研修になった。ストレスにきつちりと対処することにより、相手に「訊いて」「聴く」ことが可能になる。相手を大切にすることにより、共感性を持つことができる。その結果、自分も相手も大切にできるwin&winの関係性が生まれる。アサーションとは人間の成長に欠かすことのできないものであることを実感した。研修と実践とが頻繁に交差し、教員の気づきを即実践に反映させる。ファシリテーションによって開発された教員の気づきが、研修と実践のコラボレーションにより、相乗効果としてあらわれてきた。

2014年は一年生プログラムのコミュニケーション基礎、ストレスマネジメント、アサーションロールプレイングを全学年で実施した。この取り組みにより自己理解、他者理

解が進んできたと考えられる。生徒たちの中にも、プログラムの実施を肯定的にとらえている生徒が多くなっていた。「アニメの村」を3年生で実施した時「初めてみんな協力してやった。頭使った。」と不登校傾向にある生徒は語ってくれた。学校が荒れてしまうと生徒たちは人間関係に「不安」や「恐怖」を感じ他者との交わりをも持たなくなる。この生徒が久しぶりに安心して他者と交わり嬉しかったからこそかけた感想であったように思う。プログラムの力を感じることができた瞬間である。

そして、2015年度がスタートした。信じられないことであったが、清水中学校は落ち着きを取り戻した。決して、三年生がいなくなつたからというのではない。むしろ、旧三年生がもつとも落ち着いていたというくらいであったからだ。教員との関係が厳しかった新三年生、トラブルをいつも多くかかえていた新二年生たちが、仲間とともに、教員とともに歩み始めたのである。もちろん、課題を抱えたままの姿に変わりはないのだが、「安心」と「信頼」に支えられた関係性がともに課題を解決しようという動きに変化したのである。あれから一年半、「荒れ」への揺り戻しはまったく無い。むしろ、生徒も教員も新しい課題を求め達成していくという歩みを確実に進めている。

研究の検証と成果

教員の意識改革と指導力向上に繋がり、生徒・保護者との信頼関係を構築できた

教員の意識改革がどのくらい進み、生徒や保護者にどう広がったか、2013年度12月から2015年度12月まで継続的に実施してきたアンケート結果より検証する。

【教員】

「学級の子どもについて、どの子にも成長の期待を感じている」の強い肯定的評価が2013年度わずか3%であったのが、2015年度には8%と大きく改善してきた。

「教師は、子どもの成長と発達に責任を持つ存在にとらえている」58.6% 78.3%と大きく改善している。日々の教育活動の中で、生徒の良さに目を向け、肯定的に評価をする取り組みが教師や生徒同士からの認められているという思いにつながっている。

【生徒】

「私は一人の大切な人間である」76.6%と8P、「私は周りの人のためになることをする

ことができる」75.6%で、大きく改善してきた。教師への信頼感が高まり生徒同士も共感的人間関係も構築できてきた。「先生は勉強や生活でちゃんと指導してくれる」79%で、「先生は、私の気持ちや思いをよく受け止めてくれる」70.4%と、「私たちのクラスは、お互いの良いところを認め合えることができる」79.7%で、「私たちのクラスは、みんな楽しく過ごすことができる」90.7%で、どの項目においても大きく改善できている。

このように、「人間関係プログラム」のアシリテーション研修を行うことで、教員の意識改革が進み主体性が育成され、生徒たちへの期待感が増幅し、そのことが信頼関係の回復にもつながってきたと考えている。

学校が安心できる場となった

全教員で一致団結を合言葉に推進した取り組みにより学校は安心できる場となった。教員がアサーションを意識して日々の実践をしており、生徒に寄り添った適切な生徒支援と教育相談、規範意識の醸成と学力向上の取り組みが、現在の落ち着いた学校を創りだしている。アンケートのクラスに対する項目において、「学級目標達成に向けてみんなで努力できる」74.3%で、「先生に言われなくてもルールを守ることができる」69.2%で、より良い学級・学校を創ろうと努力できる学校になってきた。生徒たちも自治活動を大切にして確かな活動につながってきた。ルールが守れ、器物破損は無くなり、誤って破損してしまったものは生徒からの報告があるようになった。「学校が楽しい」と肯定的評価をした生徒が74.5%で、「人をバカにしたりしない」についても73.2%で改善してきた。昨年の体育祭の感想には、リーダーとなった三年生への感謝の気持ちを述べた肯定的な内容がほとんどであった。体育祭を成功させ、生徒集会の質も高くなり、落ち着いた状態を全校で意識できたことも安心して学校生活を送ることができる要因である。本年度の体育祭への取り組みでは、三年生が中心となった各色団のリーダーが主体的に練習の運営も行っている。行き違いやトラブルに対してもリーダー全員が集まり、しっかりと話し合い確認事項を決め「みんなでより良い体育祭を創り上げよう。」と進めていた。プログラムを実施しているからこそ、折り合いをつけた解決方法を考えることができるのだら

う。このように生徒同士の関係性も随分と変化してきた。言葉だけでは十分に表現することはできないが、配慮のある優しさや安心と信頼に満ちあふれた関係性へと変わってきている。

学校が「荒れ」を克服し落ち着いた状態になると、保護者も安心し、教員への信頼感も強くなり、学校教育活動に対して肯定的な見方から肯定的な見方へと当然変化している。「この学校の先生は、保護者と一緒になって子どもをよくしている」とする気持ちが強い」72.1%で、「学校の先生は、保護者の意見に耳を傾けている」74.2%で、「子どもの学力向上に関して、学校に期待している」78.3%で、「教師や学校への信頼感や期待感が飛躍的に高まってきた。このような変化が、様々な教育活動に対して協力的で学校の大きな力にもなってきた」としている。

おわりに

現在の清水中学校は、穏やかな空気が流れ生徒たちの笑顔や光り輝く姿に溢れている。大方中学校から清水中学校に至るまで7年間、「あいあいネットワーク of HRS」の深美隆司氏よりコーディネートを受けてきた。また、同じ実践校である松江市立第一中学校とともに開発してきたプログラムは、『いじめ・不登校を防止する人間関係プログラム』(アクティブラーニングで学校が劇的に変わる！ 学事出版 2016. 2 松江市立第一中学校「こころ。ほっとタイム」研究会・あいあいネットワーク of HRS 深美隆司編)として出版されている。フアシリテーション&ワークショップ型の授業は、現在、必要性が叫ばれているアクティブラーニングの基礎である。ワークショップをフアシリテーションとして取り組む研修も済ませ、各教科への浸透も視野に入れている。

これからの時代、特に地方では、人口の減少、少子化による学校統合が急速に進んでくると考える。統合による学校の「荒れ」は、全国的な課題となってくるであろう。人間関係をづくりを人間力育成と関連づけ、どう進めていくかがポイントであるということを、清水中学校での実践が証明しているのではないだろうか。